

特 259

546

景復安盛七
清寬宅久騎
落

廿一

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



号 259
546

坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧心鈔校

七騎落

梗概

(所) 相模の海上

(季) 八月

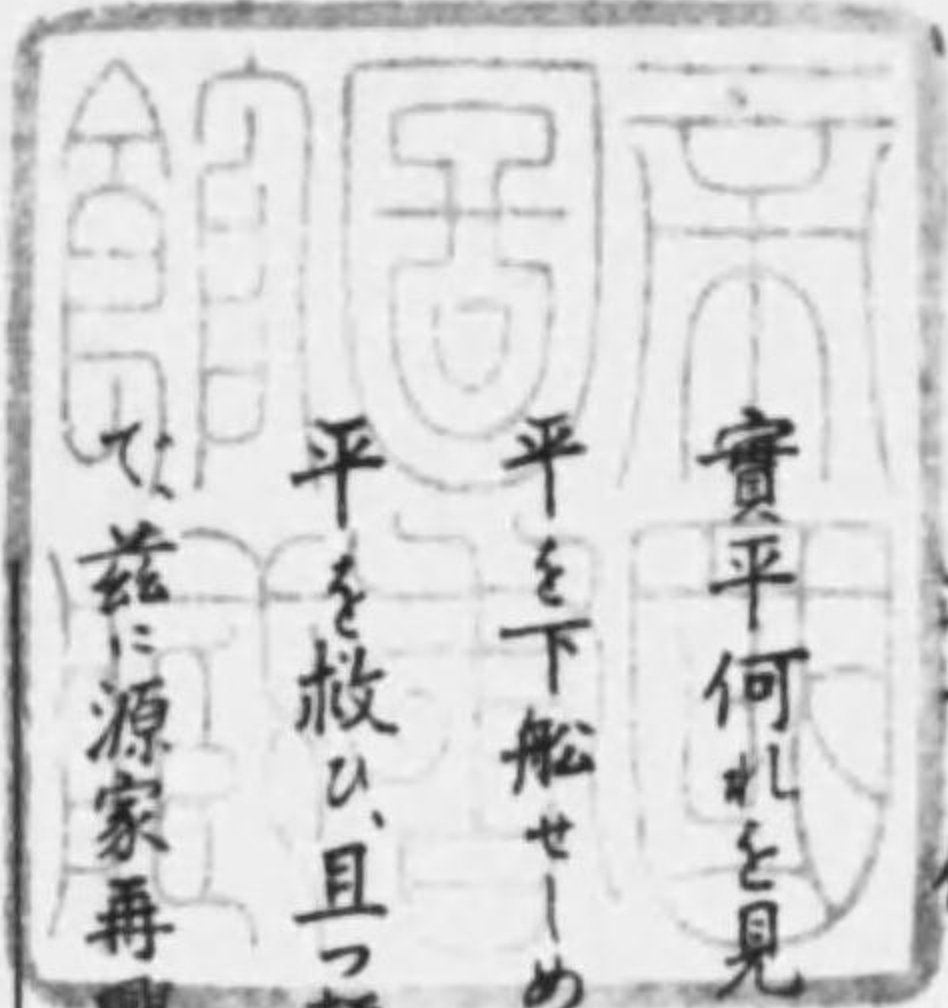
源頼朝は石橋山の戦に敗れ、主従八人船にて遁れんとしけるが、八騎落は源家に取
りて不吉の例あれば、頼朝之を忌み土肥實平に命じて一人船より下ろすべしと言ふ

實平何れを見ても誠忠の臣なれば當惑してありしが、岡崎義實の理に服し遂に一子遠

平を下船せしめ心いたましくも一同は船を急がせける。爰に和田小太郎は敵方ながら遠

平を救ひ、且つ頼朝公を慕ひて船にて追ひ来りければ一同打喜び、實平一入忠勤を抽ん

で、茲に源家再興の端緒は開かれしと云ふ。



此曲は治承四年八月石橋山の戦に敗れ頼朝主従八騎真鶴ヶ崎より安房へ落行く船中の
事を作る。史実上安房へ落ちしを謡曲にては西國へ開くと作る。又為義は保元の戦に敗れ
て東國に下らんとして病を得、近江より引返して降人となる事、保元物語などに見ゆるを
謡曲にては為義鎮西を開きしと言ふ。謡曲はかく往々にして史実とかけ作らる。
是れ即ち作者の自由創意なり。(右京)

七騎落 四巻目
二巻目

役別	装束	附
シテ 土肥實平	直面 梨子打鳥帽子 腰帶 太刀 扇	白鉢巻 着竹厚板 法被 白大口
シテツレ 源頼朝	梨子打鳥帽子 腰帶 太刀 扇	白鉢巻 着竹厚板 法被(両肩上ル) 白大口
同	岡崎外四人 土佐坊	梨子打鳥帽子 白鉢巻 着竹厚板 側次 白大口 腰帶 小刀 扇(但し岡崎ノミ 白垂法被)
子 方土肥遠平	土佐坊 梨子打鳥帽子 腰帶 太刀 扇	着竹厚板 法被 色鉢巻タスキ 白大口 腰帶 小刀 扇
ワ キ 和田小太郎	梨子打鳥帽子 腰帶 太刀 扇	側次 白大口

作物——舟

七騎落

新形
新形
新形
新形

身スレ捨スレ小舟ウラ恨トてトもト〜
なウキまヨきキやキまヨ世ト成トらトん
是ハハ

兵衛ヒヤウ佐エ頼エ朝スふケてケのケ 拵ヒヤウもエ昨日エ土エ肥スの
杉山マれマ合ツ戦ツにツおナ負ナけナ。或アルハヒ討ウてタ又マハ
ちチリリ〜〜成チてチのチ飯イにイ勢セがイ子イはイ程イ小イ。

いし

ア

一平の西玉の方へ開くをやと存じ

いふ實平 サネヒラ 此れ こゝ 解りに お報

を勢方の後ふ西側の方へむらうる言

にて者ぞ。船を用意作りぬ

畏てい こゝ 昂 スナハチ 船を用意仕てい急

い お報 實平に度供

たる者い こゝ 後者ぞ こゝ 只七騎

い お報 座 お報 相 お報 船 お報 止 お報 八 お報 騎 お報 家

改テ 祖父 お報 為 お報 義 お報 法 お報 西 お報 也 お報 一 お報 兵 お報 一 お報 主 お報 從 お報

ハ お報 騎 お報 父 お報 義 お報 朝 お報 尾 お報 張 お報 の お報 玉 お報 へ お報 落 お報 じ お報 も

ハ お報 騎 お報 思 お報 へ お報 不 お報 老 お報 の お報 例 お報 な お報 り お報 實 お報 平 お報

斗 お報 ひ お報 て お報 船 お報 よ お報 り お報 一 お報 人 お報 お お報 活 お報 じ お報 ぬ

たり。教の中に割て入尋常ぶ討死。

名を後代よあぎん心持アリ一斬てを平おらじ

忠実平の船よまひりけりコウタイ 勇オキ

変りんぬる実平多とひひの心を

思ひやり親子の別を惻オホくや

君此の事ゆたに及をん父を始ヨウク上め

よらせて皆人ごに名跡を惜ヲシら

ゆヨ上彼公浦佐用姫ガキく

唐土船を慕ひつとむくた死トリさふ

をき伏し有孫も今を平親子の

別れよ移りじと皆涙をぞ流チしる

契チギり程なまき早ふおと志チばりチたよも

しあも送を見送りたるを免ぶ
もやまきつるが浦の波を別き
有様を 余の人びとに
日 憐しめる 船の中 実平
心すらすらに 弱きとんじと中
かゝるん並もせで 心強くと跡

ふ。敵大勢をくつすや平に討
そと 船もいれしを 見給へす
が実 悲おの整りも 今を恨り
思ひ 實平の故郷を 向ひ人志れ
心のはらあをれを 平と一知
討死せよと つけきて 平に

112

思ひ子の別まで暮れ成る

一^{ツヨク}声^上張月北西の空の東の東定ぬ舟路

の那^{犯言}あまふみくるこそ舟船

ふく有^{コト}まよふるでけ舟を漕^ユゆ

あまをらんれふ船一艘うり^{コト}みま

兵船^{ヒヤウ}なり^{セン}そも^上誰人の舟やらん

コ見

我も^コはまの船^{ツナ}款^カを^タ怪^イく^ヤ思^ヒひ^コ也。

そも^上誰人^レは舟^ナやらん ^{コト}結^{ツク}句^クは^コ方^ナ

と怪^イあ^ハよ^ヨ是^レを^ト去^リ肥^ノ次^郎実^年が

家^ノる^{コト}船^ヲよ^リて^ル ^{コ見}佐^ト去^リ肥^ノ後^ノ

の^{コト}船^ヲよ^リて^ルを^ト和^田の^{コト}小^若郎^ノ舟^ヲよ^リて^ル

舟^ヲよ^リて^ル ^{コト}小^若郎^ノ後^ノ何^ノの^{コト}為^ナり

114

11

是迄ハ出ハズ 内ニヤルハ
 子細のゆひくハ味方ハ
 相ハ味方の為ナリ 先ハ味方
 ハ先ヨリ 面目もナリ事
 面目もナリ事トハ 下目ヨリ
 君と共ハ 我らも浮レハ成リテハ

云ハ道断不運ハ極ナリ者ニテハ
 我味方の陣也 恐ヒハ月日を
 事ヨリ 輕朝ハ放キテ 命有テモ
 益ナリ 自害をせんト思ハレ
 腰の刀ハ 腰ヲ切リ 何ト君ハ
 何ト君ハ 何ト君ハ

ハヤメ

コト

そとをむむよとてひまの馬の
花ぞつり。生捕る鉢よもてな
是遠付ひやし。君の心為土肥後ふ
なんぼう忠の者ふてふ。お花志
のむり危角やに及ばぬ。又時今某が
あ涙はれと出る人のたうくおが

呂きんを形から 嬉し泣の泪
何う包まん唐衣 目も夕暮
ふなぬれ月ツキの盡ツキとり何ナニも
主ツキ従ツキともに飲ツキび乃ツキ 心ツキ嬉ツキしき
酒ツキ宴ツキう那ツキ 心ツキふ実ツキ平ツキ飯ツキりふ
目ツキか度ツキ折ツキなまツキば一ツキ指ツキのツキ舞ツキり

盛久

梗概 (所) 前京都
後鎌倉

(季) 三月

平盛久は丹後の國成相寺に隠れおたりしが、捕へられて鎌倉に送らるゝ身となり、鎌倉方の土屋某に伴はれ、日頃渴仰せら清水觀世音に暇詣をなして、それより鎌倉に下りぬ。盛久は日夜讀經怠りなく死を覺悟してありしが、遂に最期の日來りて由井ヶ濱に引かれけり。かくて盛久は首を刎ねられんとせしが不思議や太刀取の振り上げし太刀は段々に折れければ、土屋も盛久も驚き不審に思ふ折しも、賴朝公より赦免の特使立ち、召に従つて盛久は賴朝公の御前に罷り出で觀世音の靈夢ありし事を語れば、賴朝公も同じ靈夢を蒙りたりとて、却つて酒宴に接し、盛久は一さし舞をまひ觀世音の功力を讃へつゝ打喜び、長居は恐れありとて退出しけりとぞ。

盛久 四番目 略二番目

役別	装束附
シ テ 盛 久	着付厚板 白大口 腰帯 掛絡 扇 数珠 経(懐中) 後ニ梨子折烏帽子 白鉢巻 掛直垂 小刀
ワ キ 土 屋 某	梨子打烏帽子 白鉢巻 着付厚板 白大口 直垂上下 小刀 扇
ロ キ ツ レ 木 刀 取	梨子打烏帽子 白鉢巻 着付厚板 白大口 側次 腰帯 小刀 太刀 扇
同 興 早 二 人	着付厚板 白大口 腰帯 扇

盛久

邦是^長謙倉名友の街内^{ナリ}ふ古^シ屋^ユの^{ナリ}集^{ガシ}
 にてい^シき^ユて^メとも^シ馬^メの^シ判^シ安^シ盛^シ久^シハ
 丹^ナ後^リの^シ國^シ成^シ相^シ寺^シに^シ懸^シん^シで^シお^シ存^シを^シ
 よ^シま^シい^シ業^シ内^シ者^シを^シ以^シて^シ捜^シか^シが^シや^シて^シい^シ
 唯^シ今^シ謙^シ倉^シ名^シ友^シの^シ供^シ仕^シり^シハ^シ ムツタリ 如^シ何^シ尔^シ

去る處よりし事の上 コト 何ぞ

にていぞ コト 我年月清水の親世を

を信しきり毎日親世の事なり

唯今親世のりなはるが恨の成り

清水の方へ樂をいさぐ賜をうけ

まゝそ安きいりの事にしての面

コト

東山の方へ樂をいさぐ

南無や大慈大悲の親世をいさぐ

いさぐはるも畏き誓ひの末一

一志を不頼ある海にてや多

徳遇の結縁空よりんや

名残惜やいつら又まゝの水寺は花盛

ヨシ
ヨ上
三井寺
カサナリ
時
カワル本
記

日^ヒ帰^ル春^を名^残家^の 一
 ぬも^も羽^山 日 一
 見^渡せ^ば柳^梅を^ま 上
 見^ゆる古^郷の^空 日 一
 思^ひ出^の恨^りな^る 上 一
 我^がま^ま 上 一

弓^馬の家^は 日
 な^らあ^と 上
 関^の東^は 上
 い^はゆ^る 上
 是^や 上

知もあらぬも逢坂の関守も今も
我をよもめめし勢田七長橋
お渡りもあきら鏡山はのこ
幸娘ぬ身なれを妻のを曾た森
をさるやも文法を張惣田の浦乃
夕汐の夕をば浪も隠されて白き

聖べしる海浮又八橋や言師山
八橋や言師山 沙見坂橋本の
淡名の橋をお渡り 旅衣かく
きてつんんと思ひきや命なりたる
小坂の中山をさるよ 変る別瀬
の大井川をさるく浪も宇津の山

越こてももろく清く深く日上トリリの入海
 田の浦お出て見まきま白なる
 吾れ富士の嶺お根山於明りや
 星月夜をも謙念に忘ふたりく
 意の程よ謙念ふる者にて分を小替
 心体より一
カリシてドツリ後中ふ道有て

夢埃を隔つ実やそこも知さりし
 山を越ら水を渡りてげ園東よ思きぬ
 百年の夢をい夢中の後二寸の光陰
 を沙裏の金を実や古の井の
 よそも代もと契りし友人も愛る世
 なまや我独り謙念ふの心を成るふ

昨夜と仰出されてハ 依ヨ援ク解ク
の違ト女メにてハ 逃ニ去リ家ノ名ヲ残シ惜ム
物ヲ捨リぬハ ぬハけテ程ヲ全ク度ノ心ヲ志ス
カスも申ス思ハなリ又ハ只今得セらキ
なまニげテ程ノ心ヲ訓練よハ返シの心傳ヒとモ
心ヲ向ス心ヲ教ムらバ二世心ノ苦ヲ志スたル
づカの心に付て事たらせしましぬ
我レ年月法ノ心ノ親世者を信じましる
毎日心ヲ經ス念ムらシましるハ今夜が限り
にてハ程ハ彼ノ心ヲと讀誦スやしらしぬ
あらてハ心ヲ離スぬハ ましるハ有難う也
心ヲ離スぬハ讀誦有らずしてハ土屋も

是にて、シツカニ 有難や

大慈大悲の薩埵の心願。定業亦能轉
を其の薩埵の善道と云ふ。然るに縁の
慈心を蒙れ我を以て等し。然るに今生
の利益も一缺けば後生の善所をも
維う難しん。二世の報を以て空しく
ムナシク

任文中

大聖の誓約。量虚をたへらむや。
或遭王難。苦法刑。欲壽終。念彼親を
カ刀身。信と壞。有難や。此の経哉

猶用せむ。昂の命も。難あり。うそを以て

實能。此の徳ゆ。ん物。うか。け。文と。中。に。

上
たとひ。人王難の。災。よ。道。とも。其。剣

順に懐きフカ又凡惑之悉退教とシエランシツタイサン

以文が射る矢も其身よ立ッヤのドイロ

けきをステル実教も一や去給がらイ

今く命の為よい文を誦する非ず

^{ニ人}種が諸悪趣地獄凡畜生シヨ生老キク

病死苦以漸悉令滅ビヤクシクい文のヨ

如くニ五濁ゴジュクの悪趣アクシユもニ悪行アクギョウ
ハガ道ミチるルやヤ有難アツガヒとク命のイ命イハ
フシ惜ウレシまマいイ時トキ後ノチ生ナれル我ワハク形カタ一ヒト死シれル
上昔ムカシ在ア灵山リョウサンのノ御ミ名ナ法ホウ華カ一ヒト仏ブツ
今西ニ方ハのノ何ナニもモ又マタ娑婆シャバ示シ現ゲンしル給ケル
中ひトてテ我ワらガ為ナれル親オン世セをヲ三サン世セのノ利リ益イキ

同トくクかカくク刑ケイ戮リクよヨ近チカきキまマのノ誓チカひ
 ふフ心ココロでデ淺シべベたタやヤ盛セ久クのノ名ナよヨも
 罰バツらラじジ輕ケイめメやヤ 上ウヘ あらアラふフまマや
 上ウヘ 小コ 睡スイ眠メンのノ内ウチふフあアらラふフなナるル矣イ後ノチをヲ
 象ゾウのノ心ココロのノ何ナニらラ有アル程ハジメやヤ 上ウヘ 既スデふフ
 八ヤチ声ノのノ鶯ウ啼ナリあアてテはハ空カラのノ時トキ即ツキ今イマ
 ヤコエ トリ ナイ サイゴ ジセツ

なナつツづヅみミちチ出デるルまマ 上ウヘ 待マツちチ後ノチ事コト
 多オホるル事コトなナまマはハそソをヲけケ世ヨのノ出デのノ
 庭ニハふフ足タラシ弱ヨクとトさサあアるル 上ウヘ 武ムシ士シあア後ノチ
 をヲ困マツみミ川カハのノ是ココをヲ別ワカれレのノ鶯ウはハ産ウマ居ル
 鐘カネもモあアるル未ミだダらラふフ 上ウヘ 籠カゴよりヨリ
 籠カゴのノ連ツラふフまマあアせセ 上ウヘ 由ユ井ヰのノ行ユキくク
 ミギハ

コカニ ステル

多きいりま

付テ

日上一

夏迄せいつる曙や

ニニニニ

後の世れうとでなるらん

地延シ

コカニ

さて由井の行ふ着しうバ産後せと

定ぬあ皮まうをやく母の娘く

盛るやうて産もあう清水のかこ

其方こそと西ふ向ひて親者の侍者せと

唱て侍れバ

招連上

ちカ取後ふロリ

つ称念け声の下よりちカ振とれバ

こいふお経の光り眼は寒ぐりよま

あしたるちカをこんきいおおては

とななるおこもあから事やらん

盛るふおのちなまきい産後せと

シツカニ

ホウゼン

有まじも一もやつらるとは事
 にては け上は何をら際かまき
 け曉ふぎの雲を交とる影りては
 くらば生ひ果てた様を心前にてか上
 従へ ^{カケケモ} ま不取心覚のち推さひ
 今ぬて始めならん ^{シヤウガク} 是も去久遠の
^{コ見}

大悲の光り何知不到の雨ならん
 然るに我け光陰を救こ 日夜
 朝暮ふ急らば彼を經を修成せし
 各分け時節刑戮を免身と思ふ
 行時急る事もなす 初夜より
 後夜の一懸まで 日 蕭然として

産したまはしにクセ中六窓いよさ月アムケ
さるに秋統カクツさる一天キヨク虚明なる肉小
思ひヤアタおもしシエン忽スふたけキヨク給ひキヨクぬキヨクくキヨクさせ
給ふを僧の香ヤア漆サの裳カク姿ジをうけ水晶
の珠ラウ救ソウとカク爪ツメ録ロクりヤ旭ハツの杖ツエまマまマうウつツ
妙女ミョウニョ正マサ女メ御ミ清シヨウ産サンにニてテ我ワ法ホウ陽ヤウ東トウ山サンのノ

清水シヨウスイのあアりリよヨるル汝ニがガ為ニふフ来キりリしシるル
本ホよりヨリ大ダイ慈ジ大ダイ悲ヒのノ誓チカエをヲ給タマはシらレん
からカんン唯タ一ヒツ喜シ成ニとシてテもモ我ワをヲ思シはシるル
時トキはハ王オウ符フのノ災サイのノ遠エンをヲ下ゲすス
汝ニ年ネン月ゲツ日ニチ多タ年ネンのノ城シヨウをヲ抽ヒんでシくク
奈ナ心シン人ジンよヨ起キたりリはハ易ヨクくク思シひヒ下ゲ我ワ

源人

46

汝が命は代りてと宣ひて是の即ち
覚ふより盛久を思ひて歎きの
を限りなき上 於此をゆりた
は曉の如く夢想も同じ告ごとく
なるは信感に限りなき上 其時
盛久は是の思ひたるに感涙

を満ち給ふを能くされは
盛久志づりて御簾をよけて
為方もなれど盛久が 命は秋
万歳の春を後子とて盛久と下さる
まきば 種は子代とて氣の木
花をよめるは盛久 命は盛久

盛久の平家清代の侍武略の志。
其外乱舞甚能の由君ゆ及れ
たり。二年小ね殿。小山草將松海の
酒方あはれて。主馬の盛久一曲一奏
の事。関東迄も認めな。ま草將。
是の悦びのおちあまじ。上

お不登なり。急ぐ仕。何と

盛久よお前にて。おをよ。おや

申す事。有難く侍

難き。時をが。た。命也。盛久
から。時。お。お。世。以て。疑。ひ
有。ら。ん。流。より。靡。く。時。な。ま。や。

安宅

梗概 (所) 安宅の関

(季) 二月

源義経は兄頼朝の忌諱にふれ、辨慶以下十二人の作り山伏となつて都を落ち、奥州へ遁れんとしけり。此由頼朝聞き知りて、國々に新聞をたて山伏を詮議せしめ、安宅の関をば富樫左衛門をして守らせけり。ここに辨慶以下の山伏は南都東大寺再建のための諸國を勧進するものなりと称して、安宅の関に通るかりしが怪しめられ、辨慶はあらぬ巻物を勧進帳なりと偽りて讀み上げなごして通らんとせしが、剛力姿にて後より通るかりたる判官義経を見とめられければ、辨慶は僅かの笈を負ひ後に引き下れば人にも怪められたり。憎き剛力めよと杖振りあげ涙をのんで、主君判官を打擲するなど、碎身苦心を重ねて漸く関をば通りぬ。富樫は後より酒を持たせて追ひつき、最前の粗念をわび酒宴を催して一同を搞へば、辨慶も舞をまひて芳志を謝し、かくて虎の尾を踏み、毒蛇の口を脱れたる心地にて奥州さして旅立ちけり。

安宅 四番目
二番目

役別	装束	附
シテ辨度	兜中 蓬懸 着竹厚板 白大口 水衣 腰帶 小刀 数珠	扇 紐
子方源義経	シテ同装(但経ヲシ物着ニテ宜 金剛杖 笈)	
シテツレ山伏十人	シテ同装(經ノシ)	
ワキ富樫左衛門	梨子打鳥帽子 白針巻 着竹厚板 込大口 直垂上下 小刀 扇	

安宅

^{コタ}ウ孫チよハ者ハ加賀の國ハ安宅ハ湊ハの
 國守シテしてハもハ頼朝ハ我ハ經ハ沖ハ不和ハ
 小ならせ給ふハまハよりハ判皮ハ後ハ十二ハ人の
 從リ山伏ト成ル也ハ其ハ下ハの由ハ頼朝
 安宅ハ及ビまハ國ハにハ新ハ國ハをハ建ル山伏ハを

白雲の越海の春もあづななりチ
 上
 時も頃二月チやチ〜チはららチ
 の十日は数月の旅をきかしてチきやチ
 この日も海を別きしてチ〜チ
 船もあらぬと逢坂の山陽すもチ
 春の浪めチ〜チ浪のチ

舟のチ〜チ海はの浦チ〜チ
 東ききや〜チ浅き芽チ〜チ
 有乳山チ〜チ海の宮チ〜チ
 神垣やチ〜チ松山チのチ〜チ
 足たるチ〜チ松山チのチ〜チ
 の浅淵はチ〜チ〜チの浅なるチ

新編

七

皆こぼれ合ダシカフ有らざるにいた。是を
ぶ一犬車にしていふこぼれ合シヤウの中シヤウのあり
はとていふ中シヤウは
関の者た何程の事のゆきき時お破つ
てお海りの事うとあゆシヤウて
軽シヤウが。
仰シヤウの如くけ関一所お破つてお海り

有らざる、易き車にてゆきささ下向
を好てささる、関シヤウはささる、あまが
ぶ犬車にしていふ、この事とも、異の義
絶る、うらうするにいた、
の者、関シヤウとも、角とも、あまが、けいひやく
累シヤウていふ、某とも、あまが、あたら事シヤウの

ハ我らを始め此のふくさいに伏して
我が何と申しても此の安がくれなはる。
けはるよその如何と存の恐れなきや
にてゆたかに條筋を除らまき。あの
強力の安とそこの肩よ並れ。此の
を深ごとくあられし。早外に神

ふて我らよの路よ。いかにあられ
いかに中人もあつむす。たうとな
實をいふ。あらは條筋とたれ
承りぬ。いふ強力。汝の安を我君
の心肩よ並れ。する。ある。あ
更がまたま。事にして。あられ。あ

未議ノ
時、〇印
ヲ除キ明

七

六

糸らせ上^{シカク} 汝は生^キる^ル 園^ノ 枝^ノ 枝^ノ 枝^ノ
 を^シて^テ 来^ル ^{シカク} 何^ノ ^{シカク} 何^ノ ^{シカク} 何^ノ
 夫^レ 何^ト 連^テ 終^テ 有^ル ^{シカク} 近^ク 小^シ 候^キ
 者^ニ 於^テ 有^ル 汝^モ 我^レ 君^ノ の^ハ 詔^{ヨリ} 来^リ
 此^レ ^{シカク} 此^レ ^{シカク} 此^レ ^{シカク} 此^レ ^{シカク}
 上^ノ 實^ニ 如^ク 園^ノ 生^ル 木^ト 枯^レ ても^モ 隱^キ せ^し べ^し

強^ク 力^ク 有^ル 目^ヲ 見^ル 縁^ヲ 知^ル
 脱^ス 之^ル 麻^ノ 衣^ヲ 脱^キ 牙^ヲ 磨^キ せ^し
 子^ノ 方^ノ 力^ク 有^ル 及^ビ 我^レ 終^テ 有^ル
 痛^ク に^シ け^し 及^ビ の^ハ 上^ノ 皮^ノ 形^ノ 音^ノ
 取^リ 付^ケ て^シ 子^ノ 方^ノ あ^リ 及^ビ 終^テ 有^ル 隠^シ
 全^ク 別^ク 杖^ヲ 用^ヒ せ^し 子^ノ 方^ノ 足^ノ 痛^ク せ^し なる^ニ
 子^ノ 方^ノ

山伏を探し中せとの仕事にてやまらる。
けまの某承て山伏を留めし上
その大勢は座ゆるる一人も海へ下
る者なし 委細承りし其に飛り山伏
とこそ留めし作しなれ其の山伏と
もと免れしとゆり 相言 やお目も三人斬る

未強時
△中取
△ト

よむ 付テ 扱その切るが判安敷り
△ 免 あらむつうやとふ角に一人も海へ
下す海いよむ 扱 扱我らともし
にて得せられんか 免 中し仕事
云活道断 ト かる不運なる如く来り
カ ツ 是れ物まけよむ力及ぬらふ

山伏

也

家朝の勤めを始むるも、^{ジンビヤウ} 終つて得せ
 らまきうするにて、^上 始むるが渡りゆ
^キ 上 妻山伏といつた殺の後、^{ギヤウ} 妻の死
 をうけ、^ミ 身を不動の玉の容を
 かぎり、^{キン} 梵中といつた五智の宝冠
 たり、^ミ 十二国縁のむらも忍て

^ミ 一 命の受院は柿の條懸
^ミ 二 胎花黒色の脚絆をきき、^ミ 扱又
^ミ 三 八目の草鞋、^ミ 糸の蓮華を
^ミ 四 踏まへり、^ミ 出で入る息よの叫の
^ミ 五 二文字を唱へ、^ミ 掃身掃縁の山伏を
^ミ 六 愛して付南め給らん事、^ミ 明玉の

44

照後をうり新う 徳野権現の

心算を当らん事 立所を於て

疑ひ有るからん 又同三三 ねんあびら

うむけんと珠救さらくと押もめを

近頃辨務より 徳北山伏より後ふ

毎一カス一。先より承りし南都赤木寺

勅進と仰らるる定めて勅進様のお産

なまは事いゆまへ 勅進様を控され

ゆいそにて徳ゆやさうまらにてゆ

何勅進様を徳めといや 中一の事

心算やてん本より勅進様いあらばそ

上 及びの中より往來の巻物一巻を取り

讀物引
時よみ
上りれ
ステル
○平服
文白だ

勅進長と名付は、さうらふを
讀上りれ。まづら、
大思教主の秋れ月、涅槃のまよ
隱き生れた長女のなつた、
愛人とな、愛子中頃、
海を津名を、
海を津名を、

幸の突おの夫人は別れ、
軽く涙は眼より有る、
く思ひを、
佛を建ま、
事とらね、
諸酒を勅進、

勅進

勅進

是は世にて、無比の楽よ誇り
尚来にて、教子蓮華は上よ座せん
佛令施主敬て白すと天も知る事と
續上たり。○國の人と野を憐
怒れをなして海にけり。一
あまのりし。承りし。いかに

是成強力留れとこそ
強むるハ一期の浮沈極まりぬと
皆一同よ立ゆる。あ、替く。
遠て長を仕換むるか。何とてこの
強力いあたらぬぞ。是はけ方より
留てい。ま、何とてあ留れぞ

^{コト}あれ強力がちと人^{コト}は從ては程^{コト}は面ては
^{コト}何と人^{コト}人^{コト}は似たると、^{コト}録^{コト}からぬ傳
^{コト}家^{コト}扱^{コト}誰^{コト}は似てはそ ^{コト}判^{コト}皮^{コト}皮^{コト}は
^{コト}似^{コト}る^{コト}と^{コト}者^{コト}の^{コト}程^{コト}は^{コト}者^{コト}の^{コト}間
^{コト}面^{コト}て^{コト}は ^{コト}何^{コト}と^{コト}は^{コト}強^{コト}力^{コト}が^{コト}判^{コト}皮^{コト}皮^{コト}は
^{コト}似^{コト}た^{コト}る^{コト}と^{コト}也 ^{コト}中^{コト}は^{コト}事 ^{コト}云^{コト}信^{コト}

^{コト}道^{コト}断^{コト}判^{コト}皮^{コト}皮^{コト}は^{コト}似^{コト}る^{コト}強^{コト}力^{コト}め^{コト}ハ一期
^{コト}の^{コト}也^{コト}ひ^{コト}が^{コト}家^{コト} ^{コト}獲^{コト}ち^{コト}也^{コト}日^{コト}言^{コト}は
^{コト}能^{コト}也^{コト}は^{コト}酒^{コト}を^{コト}指^{コト}さ^{コト}う^{コト}も^{コト}る^{コト}と^{コト}も^{コト}ひ
^{コト}は^{コト}る^{コト}ふ^{コト}僅^{コト}の^{コト}及^{コト}負^{コト}て^{コト}訟^{コト}は^{コト}下^{コト}れ^{コト}ば^{コト}そ
^{コト}人^{コト}も^{コト}怪^{コト}し^{コト}む^{コト}き^{コト}終^{コト}る^{コト}は^{コト}程^{コト}ふ^{コト}は^{コト}し
^{コト}増^{コト}し^{コト}と思^{コト}ひ^{コト}は^{コト}る^{コト}ふ^{コト}い^{コト}て^{コト}物^{コト}見^{コト}せ^{コト}る^{コト}

只儀の下人の如く教に於て我を
恥くるは其妻を謀罪を八幡の
御籠りと思ふをかくぞ見えぬ
上りて
其母の末母を及ぶといふを日月を
いよて地はあつたといひぬ方後
なりをいよぬ主君をお杖の天罰を
ハカリコト
カタシケナ
オホ
ニチ
グワツ

あらぬ事や有らば
の果をみていよぬ末末を怨といふ事
今ふらまを身れよよ其妻を奉月
二月や下の十日の日の程を遠れぬ
こそ不思議なき
十余人
夏の是たるを地して

たぐひよ一面を合せはる流をうりなる。
有様家カキト統るふ我終る馬の
家よ生れ来て命を頼頼まり
かを孫と西海の波よ流め山無海岸
に起伸ゆり武士の糧乃神抱
行あ様も浪れ上感時舟清じ

風波よ身を任せある時山脊の
馬蹄もえぬを中ニシトコに海ありある
夕波の立ちくるまや次サ明石のニナリとく
三年の祥もなく歌をてほ一テホ廉を
世の生志勤も徒ヤア成軍るけ方の
そも何といふ因果イナグワぞやニ実ミや上

思ふ事^トを^レ縁^ハ我^ノ夢^ニ世^ヲあれと
日
志^レれ^ルを^レ縁^ハ思^ハひ^ハ匹^セば^レ持^ラら^レの
世^ト成人^ハ苦^シみて^レ終^ハ後^ハ縁^ト増^スの
世^ト有^ルく^レ遠^キを^レ東南^ノの^レを^レ起^ス
西北^ノの^レを^レ起^ス。素^メら^レれ^ル埋^ル其^ノ身^ヲを
心^ヲわり^テ縁^トを^レ起^ス。世^トは^レ神^トも

佛^トも^レ海^ノを^レ渡^リぬ^ルや^レ恨^メぬ^ル愛^ス世^ヲや
何^レら^レ恨^メぬ^ルの^レう^キ世^ヲを^レ起^スに
誰^レり^レ有^ルか^ク。生^ルの^レ山^ノ伏^キを^レ起^ス。御^トあ^レを
か^レて^レ解^ルに^レ面^ヲ目^ヲな^クい^レ程^ニ。退^キ存^ス
申^スく^レ酒^ヲを^レ一^ツ杯^ヲあ^ラせ^ラせ^ラず^ルに^レ有^ルぞ。
汝^ハ先^ニ之^ヲ留^メめ^ルか^ク。い^ハか^クか^クか^ク

唯今の出^{シカク}送^{レウク}者^{チヤク}カ^トレ^{ホリ}て^トけ^トが^トり^トく^トい^ト海^ト

久^コ承^{マシ}り^ク片^ハ ^ト上^トて^ト ^ト実^トの^トは^トも

心^{ココロ}滑^{ヌル}たり^ト人^{ヒト}の^ト情^{ナリ}の^ト壺^{ヒラ}は^ト浮^ウけて^ト心^{ココロ}を

取^{トル}んと^トや^トは^トも^ト付^ツて^トも^トな^トほ^トく^ト人^{ヒト}を

心^{ココロ}あ^アくれ^レそ^ト異^イ服^{フク}ど^トり ^ト日^ヒ ^トあ^アや^アあ

ら^ラな^ナ面^{オモ}と^ト ^トあ^アま^マ又^マよ^ヨ ^ト陳^チめ^メら^ラれ^レて^ト

け^ケ山^{サン}陰^{イン}の^ト一^ト宿^{シュク}り^トに^ト ^トあ^アら^ラり^トと^ト ^トあ^アま^マあ^ア

して^{シテ}所^{トコロ}も^ト山^{サン}流^{リウ}の^ト葉^{エフ}の^ト酒^{サケ}を^ト飲^ムう^トよ

面^{オモ}白^{シロ}や^ヤ山^{サン}水^{スイ}よ ^ト ^ト壺^{ヒラ}を^トう^ウか^カん

て^テ流^{リウ}は^ト引^ヒかる^ト油^{アブ}水^{スイ}の^トよ^ト ^トあ^アま^マあ^ア ^ト遠^{トウ}る

袖^{スベテ}あ^アま^マき^キて^テい^イと^ト ^トあ^アま^マあ^ア ^トあ^アま^マあ^ア ^トあ^アま^マあ^ア

舞^{マヒ}交^{カウ}ハ^ト三^{サン}塔^{トウ}の^ト抱^{ダク}傷^{キズ}舞^{マヒ}延^{エン}年^{ネン}の^ト時^{トキ}の

唯今

期

松家^トは成山水^ノの流^チて叢^ニはる^ク
 我^トは^下流^ノの^下先^ヲを^お砂^ヨ
 関^ノ守^リ持^テて^ハ先^ヲを^サ
 一^トき^ハお^シぬ^ル
 なる^ハ滝^ノ水^ニ日^ニ照^ルとも^終つ^モ
 溜^タり^シて^ハ疾^ク立^テや^ハ来^ラら^ズ
 △仕奉^上

心^ニあ^リる^ハさ^カの^後者^ノの^人と^呼ば^レて^ハら^ズ
 よ^クと^ては^及を^おつ^タと^肩は^おら^ず
 虎^ノの^尾を^踏む^ハ毒^蛇の^口を^踏れる^ハ
 心^ニ地^ニして^ハ陸^奥の^洞へ^ぞり^タり^タル^ハ

小書^延年^ノ時^ハ切^ク文^ヲた^ノ通^リ
 日^ハ先^達を^まら^うよ^ク先^達を^お砂^ヨ立^チて^ハ
 日^ハ先^達を^らけ^持て^ハ先^達一^キの^舞々^ル
 日^ハ本^ヨり^舞慶^ハト^{ナル}返^唱ハ^流ノ^水一^度ニ^テ舞^ニナル

俊 寛

梗概 (所) 鬼界ヶ島

(季) 九月

平清盛を亡ぼさんと東山鹿ヶ谷の山荘に會して隱謀を企てたる俊寛成経康頼は捕られて遂に鬼界ヶ島に流罪されたり。其後宮中に御安産の御祈祷あり臨時に大赦行はれ、鬼界ヶ島にも赦免使立ちぬ。島には三人打ち集りて悲境を歎きみけるが、赦免使到着と聞き狂喜して之を迎へ、先づ康頼赦免状を披き讀み上ぐるに、成経康頼二人赦免とあり、俊寛の名なし。俊寛あやしみ筆者の誤りかと詰れば、使者は俊寛一人を島に残し置けとの事なりと言ふ。俊寛は全く失望し悲歎やうかたなくもたえけるが、時移りて成経康頼は用意の船に乗り、せめて向ひの地までなりとも情にのせてと哀願する俊寛を渚に残して、歸洛の日を待てと慰めつゝ次第に船は遠ざかり、俊寛は一人寂しく泣き沈みおけりと。

俊 寛 四番目(略二番目ニモ)

ワ キ 教 免 使	同 康 頼	シ テ ツ レ	シ テ 俊 寛	役 別
		成 経	寛	
着付段髪子目 素袍上下 小刀 扇 文(懐中)	角帽子 着付無地髪子目 水衣 腰帶 数珠 扇	着付無地髪子目 水衣 腰帶 扇	面俊寛 花帽子 着付厚板 水衣 腰帶 水桶	装束附

俊 寛

^{コト}柳是六都相廻^{シヨウ}は仕へ中^{コク}者にてい
 ねもけ^{タビ}度中^ウ官^ウ海^ウ産^ウれ^ウ新^ウの^ウ為^ウ。
 非常^{タイ}の大^シ教^ヤ免^オを^コる^ナに^ヨ依^ツて^ユま^ウの
 流^ニ人^シ教^シ免^ベある^ン中^ナにも^キ鬼^キ累^カが^イ流^カれ
 流^ツ人^ガ教^シ免^シの^シ使^シを^ツぶ^カ果^シ承^シれ^シ程^シふ。

唯今彼時へと急ぐ

成康
身上

神を

いそがしくなれど、
軽い心での

山ならん、
是、九列薩摩深

鬼界が、
成経
丹波の

少将成経、
康教
平判官入道康教

二人が、
康教
深にていなり、
我等、
時

徳野、
諸二十一度の歩、
となさん

と立、
其、
教たらで

新、
流の身、
諸、
空

愛、
成、
事、
知

け、
徳、
中、
の

道、
中、
九十九、
子、
途、
中、
悉く

上
 巡礼の神路よぬきを持げつキヤ
 宴として同く宮宿とこ慈母の
 浦の濱ゆふななる麻衣
 の志不もを唯其従の白衣にして
 志砂ととりて教深にあらゆむの
 以候して神歩を運ぶありく

一ツ上
 後の世を侍で鬼界が守となる
 牙の果れ割きよると暗きるよ我
 入ふらる 玉兔昼眠る雲母の地
 今難救宿す不萌の救寒蟬枯木
 を抱きて啼きよとてからを思らさ
 後實見が牙の上にあられては

水なれば醴酒にてなごあふるる

成
唐
少ヨ

実こそは理りなる頃長月時

守陽

花白菊

交山路

谷氷乃

彭祖

七百歳を經も

ひと汲増し深谷の水

飲らんに

実こそおと薬ありけ

底も志ら衣の濡てはす山路は菊の
露ぬるに我も子や身とあふ地なる
配不ぬもい川流そまきと夏さけて
又秋香あその葉おと草木のあそ
急なるや急流の音や思ひ出ハ
何又待てよ長れたよ者し時

法性寺法城寺時表見城のまきのむ
今に川より船をよきとてよき表滅文の秋
なれやあつきのまよふは盃の飲酒ハ
谷水の流るも又溪川あの上はれ
なるものをも物思ふ時しも今を我
限り成るまき ツ上長閑ある。進風は

舟の帆を引いて舟子や船も勇らん
急げ船よ。飛鳥が鳴ぶよ急いでい。いふ
許り者 シカク 生を船よりよらうまざる
にてい シカク 上いふけ鳴は流人の海はう。
都より赦免の状を持て来りてい
赦免のし使 シテ ア ラ 意固かよはるや

侍

下
流人の是ふに

コ見

成経康頼是に

此かゆに委安中ゆん

成経
康頼

是にに

コ見

是に相承より赦免の法状にゆ

是に相承より

康頼

是に何ら成経

此後ゆ

成経

是に相承より

康頼

柙に度中官法書の新に為よ

非者の大教ゆをるに依て是に

流人赦免ある同安に思が流の

流人の中成経康頼二人赦免有

事也 何とて後寛を成経

是に相承より

康頼

是に相承より

此名ハハを我に免状の表と成経

後

七

歌くにさへも諸のふも啼半りなる。
有極う那不切中切時を感してはむも
涙を拭き地別き我恨とてはるも
心我動きせり本よりもけつハ尼界
が語とゆめなれは鬼何る所にて今生
よりの冥途ありニ彼令エトいりなる鬼

なりといふ哀れあらざらん
天地を動かし鬼神も感となん
あるも人の哀れなる物をけつ
るも然も啼我を憐やらん
妻て思ひの解りやは先よ讀
たるまを物とて又披き同く詠と

後記

備忘

縁也〜〜〜
成経康頼と書たる其者斗り
なりぬ〜思紙も有らん
巻也〜〜見れども偽也後寛
〜書る文字のからにな〜
爰も扱も爰ならん〜

現なき後寛が有扱と〜
表れあり〜
時別梅りて
成経康頼二人の
事ならねば余所の款を振捨て
二人が船も承むと〜
僧也

後實ヨウ六ハ日ニ 中ナカの者モノふハ外ソトて 松浦マツウラ左サ
用ヨウ娘ニョウも 我ガ身ミにニよヨまマるルも 多タくクと 産ウも
惜オシまマるル泣ナキ居イりリ ヤア キミ マ成マ経キ サ上シ イ慟ナシはハしシの
事コトや 我ガ等ト於オ海ウミの 波ナミが 能キ極クふフ也ヤ
也ヤつツて 帰キ路ロ有アるルを 心ココロを 強ツヨクく
待マたタしシ 海ウミ邊ヘを 待マたタしシの 心ココロを 強ツヨクく

声コエも 遠トホくクなるル 船フネを 待マたタしシ 後ノチに 産ウも
幸サイさサして 聞キ居イりリ ヨ 心ココロを 強ツヨクく
夕タタ波ハの 音ネも 声コエに 後ノチに 實マコトを 見ミるル 心ココロを 強ツヨクく
程ほども なく 船フネら ぎ 帰キ路ロ有アるル 也ヤ
是コト 誠マコトに 申マウすル 心ココロを 強ツヨクく
親オヤ母ハハし して 海ウミを 見ミるル 心ココロを 強ツヨクく

後二

十二

声も姿も涙もあはれなる神付浪
 に逢らむとて終て紅顔も人形も
 消てくもあらず成にたり泣きまじく
 心を成にまじ

景 清

梗概 (所)日向園宮崎

(季)不定

平家没落して景清は日向の園宮崎に流され、刺へ盲目となり里人の情により憔悴の身を松門に獨閉ちて佗びぬける。景清其昔尾張熱田の遊女と馴染みて設けし人丸といへる娘、父を慕ひて遙々日向の園まで来り、偶々松門を叩きて景清の在所を尋ねしが、變り果てたる身を耻ぢて景清は知らぬ體にて、斯様な者をは餘所にて尋ね給へとやり過しぬ。里人人丸を不憫に思ひ、自ら景清の許に案内し「景清」と呼びかれば、景清は今の今自分を尋ね送々下りたる娘人丸をもやり過して無情の境涯を悲しみぬける折なれば、里人の音訪れをも腹立たしく思ひしが、娘をも導きしと聞き、景清も遂に名乗りてその邂逅を喜び、在り日八島の戦にて高名をあけし時の様を物語りて娘をも慰めけり。かくて景清餘命も少なければ立歸りて我が亡き跡を弔ひたまはれと諭し涙乍らに惜しき別れを告げける。

景 清 四番目(二番目ニモ)

役別	装束附
シテ景清	西景清 沙門帽子 着付厚板(着流三) 白大口 水衣 腰帶 扇杖
シテツレ人九	西小西 髪 髪帯 着付酒 唐織(着流二)
ワキツレ人九ノ從者	着付段付斗目 素襦上下 小刀 扇 ワキ同装(但し着付無地付斗目)

作物 葦屋

景 清

^{召連女} 消ぬ夜も寝なれづく^{ツム}あは身
^{召上} 是は縁念を飛之^{ツム}
 谷まゝ人丸も市ス女にて結ふ^{サクラ}扱も我父
 悪七を清と景清ハ平家の味方成ふ
 より源氏ヲ憎^{ニクク}むれ日^ヒ向^{ウカ}け^ク玉^{タマ}宮^{ミヤ}家^カと

中今平家音習ナリ
 松門獨り知て年月を送りて
 清光をよみされれど時のうらむをとも
 辨へど暗したる夜室にほよ眠り
 衣を暖よのそよまぶをあへ
 髑骨と表たり
 宵くとならば墨にこそ
 漆

魚丸袖の浅るや金にまき
 有様を我ふ身よ
 誰か有て憐このられをさ
 よも形
 是成草の庵回て誰住くも
 さるに声称らふ夢あるも食

承り及びしたる様よはせが本より
盲目あるまみる事なりさしも浅る
あはれ有様うきたまりそるふ表を
信せたり。妻あま事をばおぬにておる
は。 扱ひけりていぶ産なげま。
是より奥へおが有て尋せされぬ

予ん現やる時今の者といふ成者ぞと
思ひてゆくは盲目ある者れ子にて
ゆきしふ。我一年尾張の玉舞田
にて抱女とお別れけ子をまらうく。
女子なれば何の用ふらまきと思ひ。
鎌倉名地が谷の長よ新々をうが

別れぬ親子を想ふに父に向つて
コトバ詞をかたじけなく
コトバ見ぬ盲目が
コトバ心の中
コトバ里人と何のぢ用ふとくゆぞ
コトバ流されんれり
コトバ人さるでてもい
コトバ年家の侍悪七を
コトバ只今はいま
コトバゆがさうりけら
コトバなると念ふそゆひ

招連 流されんれり
招連 人さるでてもい
招連 年家の侍悪七を
招連 只今はいま
招連 ゆがさうりけら
招連 なると念ふそゆひ

盲目あると念ふ我もお尋ねる京清
ふよや^アさ^ラふ^トら^トら^ト京清の事と申
てや^ハバ^ハの^ハま^ハぬ^ハ方^ハの^ハ熱^ハ傷^ハよ^ハま^ハま^ハ
果^ハ然^ハし^ハて^ハ何^ハも^ハた^ハら^ハぬ^ハに^ハて^ハそ
^{招連}不^シ審^シを^シて^ハ何^ハも^ハた^ハら^ハぬ^ハに^ハて^ハそ
そ^ハ京^ハ清^ハの^ハ息^ハ女^ハに^ハて^ハ今^ハ一^ハ度^ハ

父^ハ清^ハの^ハ對^ハ面^ハ有^ハ度^ハ由^ハ仰^ハら^ハま^ハさ^ハし^ハて^ハ
是^ハを^ハこ^ハの^ハ下^ハり^ハに^ハて^ハお^ハ申^ハす^ハの^ハ事^ハに^ハ納^ハる^ハ
御^ハ座^ハに^ハ仰^ハら^ハま^ハさ^ハし^ハて^ハ京^ハ清^ハの^ハ
引^ハ合^ハせ^ハや^ハされ^ハて^ハあ^ハら^ハし^ハて^ハお^ハ申^ハす^ハ
道^ハ巧^ハの^ハお^ハ申^ハす^ハの^ハ息^ハ女^ハに^ハて^ハお^ハ申^ハす^ハ
ゆ^ハり^ハ先^ハの^ハ心^ハを^ハ頼^ハめ^ハて^ハお^ハ申^ハす^ハに^ハて^ハお^ハ申^ハす^ハ

上
系法は眼をひきこめて谷をたぬ
に髪をおろし名を日回の勾当と
附ひ命令を旅人を頼み我ら如きの
者の憐れを以て身命をさづきゆら
若ふ別くする者様よてゆる。泥中
されては名をたぬと持量かしてゆ。

上
某時今に休中。系法と申す下
我名ならんをみる。生時が対面
有て。昔今のお物語は。はる方渡り
上
いふに内。系法の渡り。悪せを渡
系法のわらわ。かまへく
はる方いふ。古人の者。とて尋ねて。

備^{ヒト}目^トくら^レた^カ然^カも^ス失^ク今^ト似^シま^シる^ト
所^カ痛^スなる^カ身^トの^ト癖^トと^シて^テ獲^チり^シく^ト
由^レき^レ現^レる^ト事^ト味^トゆる^トお^トい^トや^トせ^ト
目^ト我^レを^レ愛^シむ^トき^トこと^トわ^レを^レ愛^シむ^トれ^ト
人^トの^ト思^ハを^レく^ト一^ト言^ハは^レ内^トは^レ去^ル物^トを^レ
山^ト松^ト尾^トす^レい^トさ^レま^レい^トぬ^レ花^トの^トさ^レる^ト

夏の^ニ情^トた^レま^レは^レま^レ浦^トの^ト意^ト放^トに^ヤ
よ^スる^ト浪^トも^ト安^ト由^トる^ト夕^ト汐^トも^トさ^レら^レや^ト
ら^レん^トも^トま^レま^レ我^トも^ト平^ト家^トな^レり^ト物^ト後^ト
は^レあ^レて^レお^レ慰^トま^レや^レさん^トい^トふ^ト
か^レら^レ唯^ト今^トい^トふ^トか^レぶ^ト慰^トま^レ事^トの^トゆ^トひ^ト
て^レい^トし^トもの^ト後^トを^レ思^ハふ^トか^レて^レい^トふ^ト免^トれ^ト有^トう^ト

ききにしては ^{コガ} かくいふまの事
ふくむ程は苦くからぬか。いかよ
ゑ法 ^{コガ} によは 何事にしてはぞ

我らよりの ^{コガ} 法と尋ねる人の
なくぬら ^{コガ} かくいふ尋よりのか
尋ねる人の ^{コガ} あくは ^{コガ} 意偽を作ら
^{アラ イツハリ} ^{メホセ}

^上 かくいふ法のは息女と作りひて
尋ね物と何とて ^{コガ} かくいふぞ ^{コガ} 解りふ
お尋ねの程ふ ^{イタハ} ^{シク} こそは ^{コガ} 供やしてはなよ
父法 ^{コガ} ば ^{コガ} 對面 ^{コガ} かく ^{コガ} 女 ^{コガ} あ ^{コガ} かく ^{コガ} かく
こそ ^{コガ} こそ ^{コガ} かく ^{コガ} かく ^{コガ} 恨 ^{コガ} かく ^{コガ} かく
たる ^{コガ} かく ^{コガ} かく ^{コガ} かく ^{コガ} かく ^{コガ} かく ^{コガ} かく

凌ぎしあつたるむさしむら
ふなる恨ありやとて、親の心苦しむ
子いよのむらから情なや、
包む恨きとて思ふた、親にむら
落の身よ、
もの女にして、親子と名をふりあはる

解く我名も、
おとす我を恨こ、
あられ実古の跡も人をも訪へ
とて恨識も、
だよも訪なき、
一の恥れ内、

藤を絶て所せくはむ月の系清
惟よりも御座船はなきて計ふはじ
一類其以下武略もあまぐに多かれど
なと取揖の舟よのせま徒魚ごそ
あつしつ法も義なれたりし身の
麒麟もをぬきば怒馬も劣るが如く

なるも 意剛くやが先きう渡り
いふ系清はヤハ娘子のぶ不星
のれ 何事にていぞ 入時ふて
系清は高名極がやうとされ度
由作ゆそと物法有てゆをゆされ
ゆへ 是は何とやらん似合ぬあ星

にて少きとてしるしき事なる志。
領りふ不使との程ふ法てゆみせゆ。
け物法とてつ。彼者を故のゆて
強りゆ。心持よ。物法とてつ。
ねるゆ。やゆらまらにて。

語
いで其以の壽永二年二月下旬の

事なるし。平家公に源氏に譲。

と陣を海者て張てた。ひは務員
と決せん。欲も能の守。友經
信子。根と。幸。按磨の。家。山。佐。中。の
水。崎。鶴。越。よ。ま。る。追。一。度。も。味。方。に
利。が。う。り。事。備。よ。長。經。が。斗。畧。

145

146

いふに依りたるまじき事にて
九郎を討ん謀斗こそ有まなり
と宮へを言法はよ思ふ極判安
なればとておふ神にてもつらばそ
命を捨て安うなると思ひ教経よ
寔勢の眼を懐ふよれば源氏の兵

上
領守とて敵を向ふ
是を身て物にやと日
新ふお物をら免る切で無き
堪へしめて女向る者か
をつと逃さけるのがさ
源平

たぐひよるも目も慌々一人を
留ん事ハ案のち物小強子かい
おんぞ何某ハ平家の侍悪セキ清
系清と名をひけくまはふせん
とて進る約三尾の巻を忘るけり
巽の極を丸をゆりく二三度

逃のびたれをおりふ款をまば遣
きと丸懸り巽をおつるえいや
引強と極ハ切れてはあにふあきを
まは先之逃のびぬ色ふ隔てまゆり
去にても汝怖くや腕ハ強きと云
けれた系清ハ三尾の巻が首の骨

242

243

324
285

著者權所
類不許

昭和
改本
版

昭和四年九月五日印刷
昭和四年九月十日發行

訂正者

廿三世
金剛右

金剛右

發行兼

檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
合資會社
檜書

檜書

發行所

京都府二條通麩屋町東北角
檜書店京都出張所

17

17

終

